

第201回森で遊ぶ会・実施報告書 (面の木園地)

1. 実施日時 2023年11月9日(木) 11:00 ~ 15:15(現地)
2. 実施場所 面の木園地(愛知県・設楽町)
3. 参加インストラクター会員
担当: 小久保、高橋
アシスト会員: 青野、越智、小嶋、佐野、杉山
4. 一般会員の参加 合計31名(静岡市・22、藤枝市・6、島田市・1、富士市・2)
5. 募集方法 前回の参加者にチラシを手渡し、森で遊ぶ会・会員へのクチコミ、会員への募集メール
6. 実施状況

県内の森歩きにはやや行き尽くした感もあり、今回は初めての場所だが愛知県の奥まで足を伸ばした。「面の木園地」とは聞き慣れない場所だが、茶臼山高原道路の途中にあり、愛知県でも最大のブナ原生林が残っている所だ。今回担当の小久保会員が以前に行ったことがあり、紅葉が美しいということで行ってみることにした。片道3時間ほどの距離だが、実際には休憩やお土産買い等あって、片道ほぼ4時間を要した。いつもより早めに出発し、遅い帰着ともなったが、それでも何とか現地で4時間の山歩きを楽しんでいただけた。



インストラクターも含めると40人近い団体が、いざ出発

秋も深まったこの時期、面の木園地ではブナ原生林では落葉も進み、色とりどりの落ち葉を踏みしめながら明る



これが今回の「目玉」、メグスリノキの紅葉

い森の中を歩くことができる。太平洋型のブナ林であるここには、ブナの他にミズナラ、種々のカエデ類、ホオノキ、ハリギリなどが混生している。この森にはとりわけカエデ類が多い事も特筆できる。イロハモミジを始め、オオモミジ、コハウチワカエデ、コミネカエデなど真っ赤に染まるカエデ類と、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、オオイタヤメイゲツなど黄葉のカエデ類が入り交っていた。落ち葉にはこれらの色とりどりの葉も加わっていたが、カエデ類は少し落葉が遅いので、木々も色づいた葉で美しく飾られていた。

更にここには今回の「目玉」とも言うべきメグスリノキがある。おそらく自生だろうが、林道を歩いた先には数本が、また登山道に沿っても何本かが生えていた。メグスリノキはカエデの仲間、その紅葉は逆光で見るとサーモンピンクとも言うべき独特の色合いをしている。参加者は一様にこれを見上げながら、写真に収めていた。また登山道の周囲には、コマユミが数多く見られた。ニシキギの仲間だけあって、これもピンク色の紅葉が美し

い。ややキツイ登りに喘ぎながらも、周囲に目をやると太陽を背にしたこれらの紅葉に思わず見惚れてしまう、そんな山歩きになった。

今回のコースは山頂まで標高差にして200m程を登って下る、謂わばハイキングの設定である。我々インストラクターもそうだが、年々参加者の体力を考えなければいけなくなる。今回も途中でリタイヤする人が出ることを想定し、幾つかのエスケープ



逆光で見るコマユミの紅葉も美しい

ルートを設定しておいた。しかし実際には皆さん頑張って山頂まで歩き、実際にエスケープルートを使った人はごく一部に留まった。天候は晴れたり曇ったりで悪くなかったが、途中の展望台から見える南アルプス南部にはうっすらと雲がかかっていた。それでも風もなく、また暑すぎも寒すぎもせず、穏やかな天候のもとで自然の紅葉に囲まれての山歩きを堪能することができた。

参加者には3班に分かれていただき、それぞれに2~3名のインストラクターがついてガイドした。以下各班の様子も紹介して報告としたい。

【1班】担当：杉山、高橋

バスの車窓から見えるダンコウバイの黄色が褪せていたのが気になっていたが、面の木園地は思った以上に冬支度が早く進んでいた。紅葉の中心はやはりカエデ類で、イロハにオオモミジ、コハウチワ等々、それぞれの鋸歯、葉柄、色、艶など比較しながら歩いた。ダンコウバイはすでに落葉していて、鮮やかな真黄色の黄葉は見られなかった。それでも冬芽の観察と名前の由来などを説明した。



マユミを見る第1班

ドウダンツツジとウツギは果実が少々似ていて、どちらにも可愛い蕊の名残が残っていた。道に切れ込みのある大きな葉が落ちていた。ハリギリである。

「センノキね」と、参加者からは別名が飛び出した。利用法と気候変動に対処する能力があることなど特徴を説明。同じく大きな葉を持つホウノキでは、種子は既になかったが古い果実を拾い、鉢巻状の托葉痕や花びらの落痕や袋果の一つ一つを観察した。また化粧品など利用法についても解説した。



ウラジロモミの球果を拾った

事前の紹介で、モミのマツボックリは樹上でバラバラになってしまうので手にすることはほぼないとのことであったが、完全なものが運良く1つ落ちていた。地上に散乱していた種鱗と苞鱗を拾って、両者を見比べながら確認もできた。ブナとミズナラにつき、両者の生存戦略の違いなどを説明した。特徴のあるフクオウソウの葉を見ながら、各地ですでに絶滅、絶滅危惧種に指定されるなど数が減っている貴重種であることを理解してもらった。終点の駐車場近くではアズキナシを見つけ、頭上の枝の赤い果実が双眼鏡で観察できた。またそろばん珠のような皮目のついた特



メグスリノキを皆で見上げる

特徴ある樹皮を覚えてもらった。このアズキナシやハリギリ、タンナサワフタギ、ブナ、コナラなど、この面の木園地には、特徴ある樹皮を持つ樹木が多いので、それらを見られたのもよかった。

最も参加者の心に残ったのは、展望台周辺から山頂にかけて点在するコマユミの紅葉ではなかっただろうか。逆光に透けるメグスリノキもよかったが、やや紫がかったその色は何とも優しく美しく、ずっと心に残るものであった。双眼鏡とルーペを駆使し、急な山道を頑張って登り、手足

だけでなく耳や目、感触、匂い、味とまさに五感を使いながら歩いた観察会になったと思う。春の面の木の山を想像しながら、また来てみたいと思った方もいたのではないだろうか。 (杉山 記)

【2班】担当：小久保、小嶋

当班は比較的昔からの参加者が多い班で、これまでいろいろな森を見てこられた方々だ。それでも黄～赤のグラデーションになったカエデや真っ赤に染まったドウダンがいきなり林道脇に現れると、思わず「わあ、綺麗!」と皆さんが歓声を上げていた。そこで、「日光や京都の渋滞と喧騒に巻き込まれなくても、こうして自然の中で静かな紅葉が楽しめるのはこの会ならではの、ですね」と、しっかり宣伝もしておいた。

赤や黄色のカエデを見飽きた頃に、紅葉したメグスリノキが現れる。「これが今回の目玉です」と言って、その独特の色合いを見てもらった。ただ正直言ってややピークを過ぎたようで少し褐色も混じっており、「下見の時はもっと綺麗だったんですけどね」と、思わず禁句が出てしまった。それでも皆さん下から見上げながら逆光での色合いを丹念に確認したり、「この色が素晴らしい」と言ってくれたり、それなりに喜んでいただけただけようだ。その落ち葉を拾って黒い剛毛だらけの葉柄や葉裏を見てもらうと、あの美しい紅葉との落差の大きさに皆さんが驚いていた。



林道を歩き始めた第2班



落ち葉を踏みしめながら山道を登った

登山道に入ると、最近のこの会ではなかなかないような登りが待っている。足許に気を配りながら登ってゆくと、いろいろな落ち葉が目に入る。そこで「あっ、ここにもメグスリノキが!、皆さん上を見てみましょう」、「この赤い葉はコハウチワカエデ、こちらは先が尖っているのがコミネカエデ」、「このピンク色はコマユミ」などと、落ち葉を手にとって説明しながら進んで行った。そうするといつの間にか展望台の下まで登り着いていた。「そうやって落ち葉を見ただけで、それは

何かが分かると楽しいでしょうね」という声がしたので、「それには、何度もこの会に参加することです」と、また宣伝をしてしまった。

山頂まで登った後は、ブナを中心とした原生林の中を落ち葉を踏みしめながら下ってゆく。ブナの実を探してもらったが、やはり殆ど見つからない。辛うじて僅かな殻斗だけ拾ったが、むろん中は空だった。改めて、熊騷動は東北だけの話ではなさそうと皆で得心した。それにしても晩秋のブナ混林は気持ちが良い。落葉した明るい森の



ブナ原生林を歩き下った

所々には、まだ色鮮やかなカエデなどが残っていた。そこに点々と生えるモミヤツガの濃緑が、更にアクセントを添えていた。色とりどりの落ち葉に覆われたフカフカの林床を、それを踏みしめながら歩くのはまたとない体験だろう。もう苦しい登りはないという安堵感もあって、皆さんルンルンで駐車場まで歩き下ってくれた。（小久保 記）

【3班】担当：青野、越智、佐野



ドウダンツツジの実を見る第3班

「ガマズミ」になったという説があることを紹介すると、納得して頂けたようだった。

昼食場所(P2付近)では、メグスリノキが紅葉していた。サーモンピンクとまではいかなかったが、それに近いきれいな色をしていた。昼食後は展望台を目指して歩き出すと、また樹高の高いメグスリノキが生えていた。先程の個体よりもサーモンピンクに近い色で、逆光で見ると筆舌に尽くしがたい色合いを醸し出していた。展望台までは急な遊歩道が続く。足元の落ち葉

3班は3名のインストラクターが11名を案内した。今回は紅葉を楽しんで頂きながら、主にカエデの種類や紅葉の仕組み、ブナについて知ってもらうことにした。P1駐車場を出発し観察を開始すると、ムラサキシキブ、コナラ、イロハモミジ、ドウダンツツジが出迎えてくれた。ムラサキシキブには紫色の実、ドウダンツツジは燃えるような真っ赤な葉でイロハモミジは紅く色づいていた。イロハモミジとカエデ類の特徴(対生、翼果)を解説した。ガマズミも赤い実を付けていた。味わってもらったが、酸っぱいようで、おいしいという人はいなかった。「噛み酢実」が訛って



メグスリノキを逆光で見上げた



落ち葉を踏みしめながら、山頂に向け登り始めた

を踏みしめながらゆっくりと歩くと、所々に針葉樹(ツガ、ウラジロモミ)が目についた。球果が落ちていたので、両種の違いを観察してもらった。鉄製の階段を登ると展望台に到着。ここで遠くに見える南アルプスの山脈を眺めながら小休止した。

休憩後は山頂を目指して歩き出した。ブナの木が目立つようになってきたので、ブナの語源や葉や木の特徴、幹の地衣類、結実周期等を解説した。ブナの生き残り戦略や地下に水を蓄える働き、戦後の拡大造林によって国内の多くのブナが伐採されてしまったことなどを知ってもらった。天狗棚の山頂ではブナの実を探してもらったが、「今年はブナの実の凶作」と言われているとおり、ここでも一つも見つからなかった。そこで森のドングリとクマの話をした。最近秋田県を中心にツキノワグマによる事故が多発しているが、その要因を私見を交えて解説した(7月の大雨による影響、イノシシの増加によるドングリの奪い合い等)。興味を持って聴いてくれたようだった。

帰りは、A・OLコースを通してP1の駐車場まで歩いた。A・OLコースは、「オール・オールドレディ」の方々が歩く、皆さん向けのコースの略だと紹介すると、大爆笑が起こった。駐車場までは直ぐなので、もう一度ブナ林の景色を眺めてもらいながら、全員が無事に駐車場に着いた。

帰りは、A・OLコースを通してP1の駐車場まで歩いた。A・OLコースは、「オール・オールドレディ」の方々が歩く、皆さん向けのコースの略だと紹介すると、大爆笑が起こった。駐車場までは直ぐなので、もう一度ブナ林の景色を眺めてもらいながら、全員が無事に駐車場に着いた。

【スナップ写真追加】



林道を歩き始めると、すぐにモミジやドウダンの紅葉が



ガマズミの実を食べてみたが、酸っぱい!



メグスリノキの紅葉を見上げた

以上 (報告まとめ: 小久保)